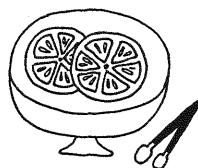
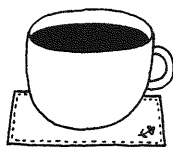


診断名がつかないと 子どもも理解はできないか？

山崖 俊子

筆者は大学で学生相談を担当しているが、最近とても気になる学生がいる。それは抑うつ状態を呈し、目の前の課題にも手をつけられず疲弊しきった様子、そして何よりも人とかかわりに恐れを抱く学生の姿である。

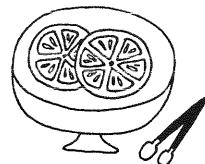
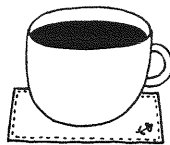
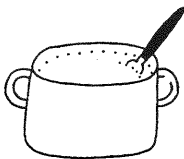
いわゆる「うつ病」ではないので薬が効果的に働かないし、ゆっくりゆっくり話を聞いていくとこれまで教師からも友達からも排除されることが多かったようである。自分なりに一生懸命やってきたつもりなのにどうもとんちんかんな、場に相応しくない態度・行動をとっていたらしいという。勉強だけはよくできたので大目に見られた部分と、逆にこれだけできるのにその態度は真面目にやっていない証拠だと怒られる場合とあったようだ。



ある学生は面接場面で迷路や幽霊や顔のないお化けばかり描いていたが、あるとき幼稚園での記憶を辿りながら次のような話をしてくれた。「死んだはずのためにお墓を作っておあげましょう」と先生から言われたが、お墓が何たるかさっぱりわからず自分なりに何かを作らなければと砂場で山を作っていたら先生から何やってると叱られたと。年長児でお墓を知らないというのも問題かもしれないが、知らなければ知らないで周囲の子どもたちを真似るなど、それなりの合わせ方ができるはずだ。彼女に欠けていたのはそういう臨機応変さである。一方で彼女は平仮名・カタカナ・そして多くの漢字の読み書きができ、古文を讀んじ、ヴァイオリンを弾き、算数の九九も間違いないでできたという。先生からみるとこのバランスの悪さは信じがたく、親の知育偏重の賜物と快く思わなかったのも無理からぬことだったかもしれない。しかし彼女はいたく傷つき、以来、どこにいても他人の目につかないよう、目立たないように行動するのが習慣となったという。

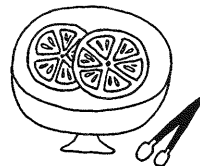
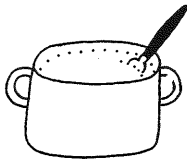
小学校にあがっても勉強はトップだったにもかかわらず先生の覚えは悪く、結果、友達からもはじかれることが多く、先生・そして友達が怖くてしかたなかったという。

また、ある学生は新学期を迎えるたびに調子が悪くなり状況に慣れるにつけそれなりに落ち着きを見せるのだが、日々の課題をやらなければいけないと思いがらかなか取り掛かれずに何時間もボーっとしたまま時間が過ぎていくといった、抑うつ状態が続いている。幼稚園・小学校はそれなりに元気に過ごしたというが、彼女の生い立ちは大変な努力によって維持されていたことがわかる。例えば、ピアノが非常に上手かったようだが、



一度聞いた音はしっかりと記憶されその記憶を頼りに弾いていたが、楽譜を見ることをきつ
く指導され、楽譜を読めない彼女は先生の指示に従って顔だけは上を見て弾いていたとい
う。幼稚園でも学校でも今、何をするかが期待されているかがわからず、質問するとき
ちんと聞いていないからと却って叱られるので彼女なりに行った工夫はそつと周囲を見回
し、真似をするという方法だったという。七夕で短冊に将来なりたいものを書くと言わ
れたが全くわからず、隣の子が看護婦さんと書いていたのを盗み見し同じように書いたと
いう。大学進学に当たってもやりたいと思うものがわからず、英語はいつも高得点だった
ので先生の勧めに従って英文科にしたという。しかし彼女は英語がわからないといつも落
ち込んでいる。どのようにわからないかを詳細にきいてみると、例えば「often」しばし
ば」は知っている。しかし「しばしば」とは何を意味するかがわからないのだという。こ
のように彼女は幼稚園や学校ではひたすら抜群の記憶力を頼りに、周囲の期待にたがわぬ
ように、いわば外的適応だけを目標して生きてきたらしい。

以上紹介した彼女らは今ではしっかりと診断名がつくはずである。「高機能自閉症あるいは
アスペルガー症候群」などと。幼稚園や小学校では今、こうした子どもをすばやく発見
し、特別支援教育の流れに乗せることが強く叫ばれている。学校に配置されているスクー
ルカウンセラーの研修ではこうした軽度発達障害といわれる子どもの鑑別力が特に求めら
れている。確かに彼らはふざけているわけではない、怠けているわけではない、親が悪い
わけでもないのだから誤解を避けるためにはいち早い診断によっていわゆる二次障害を軽



減できるというわけである。わからないわけではない。しかし、である。子どもの心を理解し指導する専門家である、保育士等幼児教育に携わる人が目の前の子どもの行動をどういう気持ちで行動しているかがわからず、結果であるできなかったかということしか見えていないというのでは専門家としての「資格」を返上した方が良いのではないだろうか。

もちろん子どもの病気の中でその診断が一分一秒を争うものもあり、その診断によって明らかに治療効果が有効であるものもある。しかし、知的発達遅れの遅れも含めて発達障害の診断はそういうものではないことは自明の理である。保育者の中には勧めに従って病院に行こうとしない親をひどく責めるものも少なくない。「この子は遅れているわけではない。ゆっくりなだけだ」と言い張る親を事実を認めようとしな親と快く思わない傾向は強い。親と専門家である保育者とは子どもに向かう姿勢は自ずと異なるのだ。まさに「あるがまま」の子どもの姿を誤りなく受け止めることが保育者の仕事だ。これまで見たこともない子どもの姿に出会ったとき慌てるのは当然である。しかし保育者はすばやく立ち直り冷静に子どもを見ることにより、行動の意味が見えてくるはずである。保育者にとって経験のない子どもの行動をすぐさま「異常」とか「ふざけている」といつて排除したり咎めたりすることだけは厳しく戒めよう。診断名を求める心は不安になることを避けたい心に他ならない。ペーター・ヘルトリング著『ヒルベルという子がいた』（偕成社）が参考になる。

（津田塾大学）

